

五、牛盗人

これは『雜宝藏経』にあらわれている物語である。

昔、ケイヒン国に離越尊者という阿羅漢があつた。尊者には阿羅漢のさとりを開いた五百人のお弟子があつた。

彼は常に山の中で坐禅していられたが、ある日、牛を失つた人があつて、この山の中に牛をたずねて入つて来た。その時、離越尊者は、草を煮て、衣を染めていられた。しかるにその時忽ち奇怪な光景があらわれて来た。衣は牛の皮と化し、染汁は牛の血に、染草は牛の肉に、鉢は牛の頭に変つてしまつた。

牛を盗まれた男は、この様子を見て、自分の牛を盗んだのはこの男であると疑い、尊者を捕らえて法廷に訴えたので、王は尊者を牢獄に入れてしまつた。尊者は何も言わないで罪人として入牢した。

尊者は牢獄の中に暮らすこと十二年、この間、馬糞の掃除という苦役をつとめて何の不平もなかつた。

お弟子の人々は、姿の見えなくなつた御師匠を探し回つたが、その行方はわからなかつた。だが十二年たつた時、お弟子の一人は、御師匠様がケイヒン国の牢獄にいられたことを見出した。そこで弟子たちは、王にそのことを告げて放免されんことを求めた。王はかかる尊き人の牢獄にあることを聞いて驚き、すぐ様獄中を調べさせたが、役人は

「獄中を調べましたが、かかる尊き人はいません。一人の沙門もいません。」
とのことであつた。馬糞の掃除をしているおちぶれた尊者の姿を見ただけでは、わかりようはなかつたのである。

これを聞いたお弟子たちは、
「それでは全ての罪人を解放して頂きたい。その中に尊者もいられますようから。」
と願つたので、その願いが聞かれて、全ての人を出獄させた。すると、その時、尊者は聖なる相にかえり、空中にのぼつて神通を現じたので、これを見た王は尊者を罪した不明を懺悔した。

お弟子たちは不審であつた。そこで「尊者よ、貴方は何故に牛盗人の罪名を負うたのに、黙つてその無実の罪に伏されたのでありますか。」

と問わざるを得なかつた。すると尊者はつぎのようなことを告白された。
「何も無実の罪というわけではない。わしも昔、牛を失つたことがある。その時牛を追うて山に入り、一人の辟支仏が坐禅していられたのに出会つた。その時、わしはその辟支仏が私の牛を盗んだのであると信じて、一日一夜その尊者を罵りつづけた。その因縁によつて、三塗に沈んだが、業報なおつきず、今世になつてもまだ、牛盗人の罪に伏さなければならなかつたのである。」

聖者は、己が罪に対する厳粛な内省の持主である。

親鸞聖人は常に「たとい牛盗人とは言わるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは仏法者と見ゆるように振る舞うべからず」と誠められた。

汝を苦しめる者も汝であり、汝を樂します者も汝である。この因果の鉄則を正しく素直に承認するもののみ、絶対自由の聖境に住する。

牢獄必ずしも牢獄に非ず、離越尊者にとりては、十二ヶ年も決して罪人の悲しき生活ではなくて禪定聖座の法悦境以外には、何ものもなかつたであろう。

汝もし、我慢、邪見、貪欲、瞋恚、愚痴、疑い等の中におれば、金殿玉楼も亦、悲しき寂しき牢獄である。

我執を離れ、苦を超越すれば、人生至る所、安心の処、南無阿弥陀仏の撰取の中にこの聖境を信樂する者は幸なる哉。